

東日本大震災から6年目の被災地を訪問して

2017. 3. 10~12.

多賀城 - 七ヶ浜 - 塩釜 - 松島 - 野蒜 - 南三陸 - 大川小 - 女川 - 南相馬 - 山元 - 仙台

写真は常磐線の車窓から見た中浜小学校 (撮影日: 2017. 3. 12.)

はじめに

東日本大震災から6年目の3.11前後に、仙台とその周辺の被災地域の現状を見せて頂く機会があった。

前半の3月10日から11日にかけては、日本免震構造協会の入力地震動小委員会で一緒に活動していた研究仲間との“津波被災地見学会”で、この研究仲間とは、3年前にも南三陸町から女川町・石巻市までの被災地と女川原発を見学したことがあった。今回は、多賀城から東松島市にかけての比較的津波被害が小さいとされている地域の実態調査に重点を置き、時間の余裕があったので、もう一度、南三陸町から石巻市の大川小学校・雄勝地区を經由して女川町の復興状況を見せて頂くことにした。

後半の3月12日は上記の研究仲間と別れて、常磐線を利用して南相馬市の小高駅までの区間を見せて頂いた。本当は代行バスを使って富岡駅まで行って見たかったのであるが、バスは1日2便しか運行しておらず、諦めざるを得なかった。小高地区は以前に宮教大の学生諸君と見学に訪れたことがあったので、今回が2度目の訪問であった。本当は常磐線の各駅で降りて周辺を歩いて見たかったのであるが、時間の関係でそれは叶わず、新駅が山側に移設された山元町の坂元駅と山下駅で途中下車し、坂元駅からは中浜小学校に向かって、山下駅からは旧山下駅へ向かって歩いてみた。

3月12日の午後には、仙台国際センター展示棟で開催されていた『仙台防災未来フォーラム2017』を見学させて頂いた。各種のテーマセッション、ミニプレゼンテーション、ブース展示、連携シンポジウムなどから成るこのフォーラムは昨年に続いて2回目の開催で、その契機となったのは一昨年に仙台で開催された『第3回国連防災世界会議』であった。テーマセッションやシンポジウムに参加することは叶わなかったが、ブース展示を巡りながら情報交換を行った。特に以前お世話になった宮教大のブースでは、学長先生はじめ懐かしい教職員仲間や学生君にお会いすることができた。

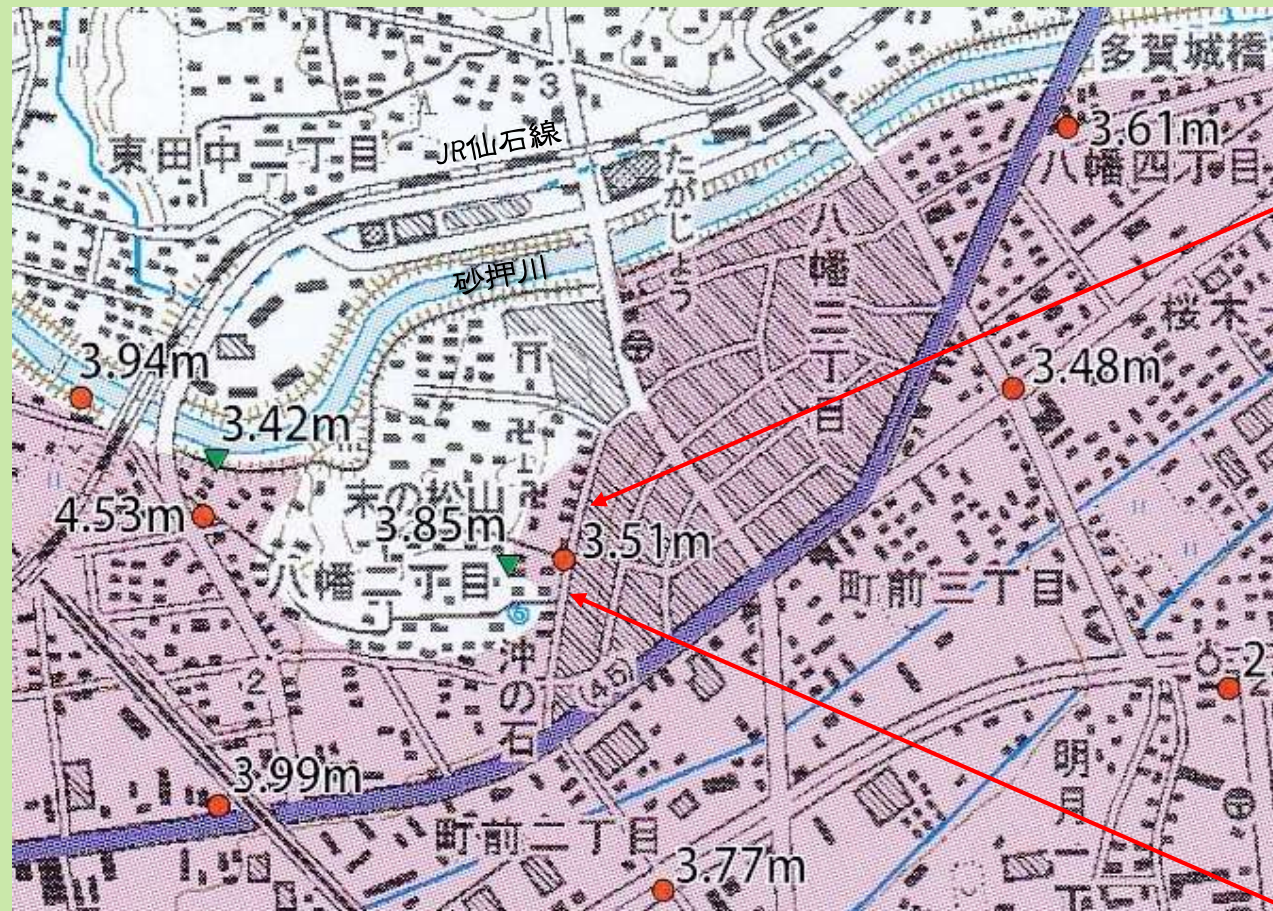
多賀城市の『末の松山』は東日本大震災でも津波を被ることはなかった！

- 契りきな かたみに袖を しほりつつ 末の松山 波越さじとは 清原元輔『後拾遺集』1086, 『小倉百人一首』1235
- きみをおきて あだし心を わがもたば す系の松山 浪もこえなむ 東歌『古今和歌集』905
- うらなくも 思ひけるかな 契りしを 松より波は こえじ物ぞと 『源氏物語』1008
- あきかぜは 浪とともにや こえぬらん まだきすずしき す系の松山 藤原親盛『千載和歌集』1187

869(貞観11)年, 陸奥国で大地震が発生し, 多賀城の国府の側まで大津波が襲ってきた. 東日本大震災の後しきりに語られるようになった『貞観大地震』のことである. 10世紀の初めに書かれた『日本三代実録』によると, 多賀城政庁の建物は地震でつぶれ, そばにあった街も津波に飲まれて1000人以上もの人が犠牲になったとある. 『末の松山』は標高10mほどの小山で津波はその麓まで押し寄せたが, 山を越えることはなかった. このことが都人に伝わり『末の松山』は決して波が越すことのない場所, 契りや約束を表す言葉として詠まれるようになったのだと言われている. (多賀城市の観光ボランティアガイド, 柴田十一夫氏のブログより)



末の松山





葦山の高台



俗称『招又』の高台



招又の高台

七ヶ浜町震災記録集による 菖蒲田浜の招又と葦山

招又の地名由来と未来への伝承

昭和30年代の初めまで、菖蒲田浜の背後には「葦山」という山があった。葦山はその後、代々橋浜の火力発電所工事の埋め立て用に削られてしまい、現在は汐見台南2丁目付近のわずかな高台となっているが、昔は標高50mに近い、本町屈指の高所であった。

昔、七ヶ浜に大きな津波が襲ってきたとき、菖蒲田浜の人たちは二手に分かれ、浜辺近くにあった高所を目指して逃げた。一方が「葦山」で、もう一方が頂上に「五社明神(ごろみつつあん)」を祀る高台だった。

「五社明神」へ逃れた人は全員無事だった。しかし「葦山」へ逃げた人たちは登り口を見つけられずウロウロするばかりであった。その様子を見ていた「五社明神」側の人たちは、大きな声で「こっちさ来い、こっちさ来い!」と手招きしたという言い伝えから、この高台は「招又」と名付けられたという。

今回もまた、招又地内には約180人が避難した。住民たちは一致団結して地震発生後の極寒の一夜を過ごし、そして多くの人が助かった。このことはまた、子々孫々へと伝えられていこう。

七ヶ浜町菖蒲田浜地区の現状 (撮影：2017. 3. 10.)

高台の招き又地区



↓長養寺



津浪から免れた招き又地区



セブンイレブンの移動販売車



長養寺の地震で破壊された石灯籠
1基は本堂前まで津波で流された。



長養寺に建立された東日本大震災被災物故者慰霊之塔

西暦2011年(平成23年)3月11日午後2時46分、宮城県三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震が発生した。その後30分から40分後、巨大津波が襲来し、七ヶ浜町菖蒲田浜地区の住民は、高台へと避難したが、指定避難場所である菖蒲田公民分館や五社明神へ避難した住民の中からも、想定外の大津波によって、多数の死傷者が出た。当寺も指定避難場所であったが、住職他檀信徒2名の判断で松ヶ浜小学校へ避難誘導し、皆無事であった。この大地震は「東北地方太平洋地震」そして震災名は「東日本大震災」と気象庁により名付けられた。その後、菖蒲田浜地区の約300世帯の住民は、仮設住宅等への入居が余儀なくされ、一日も早い復興と再生を皆が願った。以上の碑文と共に、物故者34人のお名前と年齢が刻まれているが、拝見すると60歳未満は僅か4人のみであった。